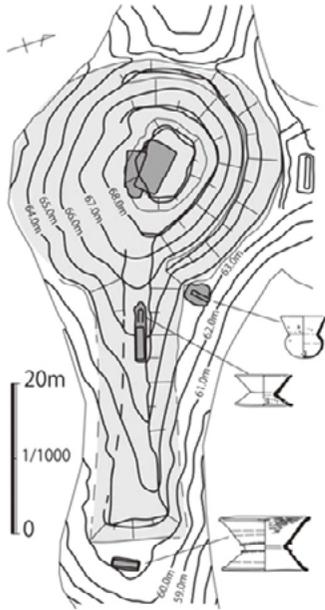


原始

第2章 古墳とヤマト政権 1. 古墳文化の展開 (1) 古墳の出現と大和政権

鳥取県内最古段階の前方後円(方)墳

〈本高 14 号墳〉★



*写真をクリックすると、鳥取県埋蔵文化財センターの本高 14 号墳出土品の紹介ページ「鳥取県埋蔵文化財センターの名品紹介その9」をご覧ください。



墳丘前景★ (鳥取県埋蔵文化財センター提供)

(注1) 時代が下ると口縁部が短くなり、口縁部径が胴部最大径を下回る特徴がある。



本高 14 号墳出土小型丸底壺★ (鳥取県埋蔵文化財センター蔵)

*銅鏡の写真をクリック↓すると、『とっとり文化財ナビ』をご覧ください。

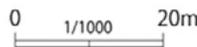


三角縁神獸鏡★ (伯耆国分寺蔵)

(注2) 3面の中国鏡は、き鳳鏡が2世紀前半、二神二獸鏡が2世紀後半、三角縁神獸鏡が3世紀中頃に製作されたと考えられる。

--- 前方後方墳としての復元線
■ 1924年の墳丘観察範囲

MN



〈伯耆国分寺古墳〉★



解説

弥生時代後期に四隅突出型墳丘墓がつくられた山陰地方では、古墳時代初め頃には方墳がつくられ、鳥取県で前方後円墳がつくられるのは、古墳時代前期でも中頃をさかのぼる時期(4世紀代第2四半期〈325～350年頃)と考えられる。前期古墳の築造年代は、三角縁神獸鏡や特徴的な副葬品の組み合わせ、円筒埴輪の形状を指標として推定されるが、県内の多くの古墳は指標となる遺物が少なく、未調査の古墳も多く年代が決められない状況であるが、その中で、県内最古段階の前方後円(方)墳と考えられるのは、次の2基である。

〈本高 14 号墳〉(鳥取市)

全長 63 m、古墳時代前期中頃(4世紀前半)

- 前方部は「柄鏡形」。
- *前期でも古い時期に位置づけられる奈良県の桜井茶臼山古墳と共通。
- 中心的な埋葬施設は未調査だが、墳丘くびれ部の2つ目の埋葬施設から前期中頃の特徴をもつ土器が出土している(注1)。
- 後円部には2基の中心的な埋葬施設が存在し、築造に時期差があり、前期中頃より築造時期がさらにさかのぼる可能性がある。
- *一般的に中心的な埋葬施設が築造当初に作られる。

〈伯耆国分寺古墳〉(倉吉市)

墳丘規模約 60 m (推定)、古墳時代前期中頃(4世紀前半)

- 2018年の調査で前方後方墳の可能性が高まる。
- 副葬された三面の中国鏡(注2)は前期でも古い時代に属する。
- 出土した鉄製品は、前期中頃の古墳の出土品との共通性が高い。

(担当: 吉田 学)

参考資料

- 広瀬和雄『前方後円墳国家』角川選書 355 (2003年)
- 鳥取県『新鳥取県史資料編 考古2・古墳時代』(2020年)
- 高田健一『鳥取県史ブックレット 23 因幡・伯耆の古墳時代』(2021年)
*墳丘図はいずれも高田健一(2021年)より転載。

★の写真及び図は教育活動以外での無断利用や転載を禁止します。